

第2章

由布市のくらしと文化



由布市の交通

ゆふしはし てつどう 由布市を走る鉄道

由布市の鉄道は、JR九州の久大本線が運行しています。市内には、8つの駅があります。JR久大本線を走る特急列車は、特急「ゆふ



いの森」(市内は由布院駅のみ停車)と、特急「ゆふ」(市内は由布院駅、湯平駅、向之原駅に停車)があります。由布院駅には、JR九州が運行する豪華列車「ななつ星」がとまります。普通列車は1時間に1本~3本が運行し、市民の足です。



由布院駅

ロビーが高さ12mの吹き抜けて、改札口がなく正面玄関からホームまで開放的につながっています。大分市出身の建築家、磯崎新氏が設計しました。木造の駅舎は、建物全体が黒で統一され上品でおしゃれ。待合室を兼ねたホールでは絵画の展覧会も行われ、どなたでも楽しむことができます。1番線ホームには、足湯(有料)があります。



みたことがあるかな？

「ななつ星」

豪華列車クルーズトレイン「ななつ星 in 九州」が平成25(2013)年10月15日に運行を開始しました。「ななつ星」の利用客は、由布院駅で一度降りて由布院のまちなかを散策したあと、旅館で1泊しています。大分県内では、由布院駅以外に、別府駅、大分駅、豊後竹田駅に停車します。

ゆふしはし 由布市を走るバス

ゆふしはし しゅるい
由布市を走るバスは3種類あ
ります。1つめは地域の人がお
もに利用するバスです。これに
は、おおいた かめい みんかん かいしゃ うんこう
大分バスや亀の井バスという民間の会社が運行するものと、ゆ
ふし うんこう
由布市が運行するコミュニティバス「ユーバス」やスクールバスがあり
ます。2つめは、かんこうきゃく おも りょう
観光客が主に利用するバスです。かめい ゆふいん
亀の井バスが由布院
と別府をつないで運行しています。3つ目は、
こうそくどうろ りょう うんこう ふくおかほうめん
高速道路を利用して運行するバスです。福岡方面
おおいたくうこう い ゆふいんえきまえ
や大分空港に行くことができます。由布院駅前の
バスセンターで乗ることができます。



ユーバスは、
このマークが
めじるしだよ！



ゆふし どうろ 由布市の道路

こくどう ごう ゆふし ちゅうしん はし おおいたし このえまち
国道210号が由布市の中心を走っています。大分市や九重町などのと
なりのまちとゆふしを結ぶ大切な道路です。
おおいたじどうしゃどう じどうしゃせんよう どうろ ゆふいん
大分自動車道は自動車専用の道路です。湯布院インターチェンジが
ゆふいん せっち
湯布院に設置されています。
ふくおかし ふくおかうこう ゆふいん
福岡市・福岡空港と湯布院をむす
ぶこうそく おおいたくうこう ゆふいん
高速バスや、大分空港と湯布院
をむすぶくうこう うんこう
空港バスが運行していま
す。いっぽう はさまちいき おおいた
一方で挾間地域は、大分
インターチェンジが近いです。平成28
(2016)年度にはゆふだけ
スマート
インターチェンジが開設しました。



由布市の文化・芸能活動

しょうないかぐら 庄内神楽

庄内地域

市指定重要文化財【無形民俗文化財】平成 19 (2007) 年 6 月 29 日指定

由布市では各地域で「神楽」が受け継がれています。特に庄内地域では、約200年続く「庄内神楽」があります。庄内神楽の特徴は勇壮でリズムカルな舞で、観客を魅了します。今では、神楽座だけでなく市内の保育園や由布高校でも取り組まれています。

庄内神楽は、大きく「阿蘇野地区系」神楽と、「庄内地区系」神楽の2つに分けられます。

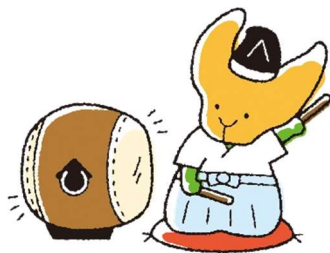
阿蘇野 地区系 神楽

阿蘇野神楽と中臣神楽の2社が伝統を受け継いでいます。起源は古く、阿蘇野神楽は、天明7(1787)年江戸時代の終わりごろ、中臣神楽は明治5(1872)年ごろと言われ、どちらも朝地町の深山八幡深山流神楽の流れをくむものです。この2社は継承された形を頑なに守りながら現在に至ると言われています。



庄内地区系神楽は明治12(1879)年ごろに庄内町高津の佐藤菊太郎氏により、豊後大野市大野町の上津八幡犬山神楽を伝授されたと言われています。佐藤氏は庄内神楽の先駆者として活躍しました。佐藤氏と、その子孫である長尾東氏により現在の庄内地区系神楽の多くの座が生まれています。今では、湯布院地域、挾間地域、大分市等で数多くの神楽座が庄内地域から伝授されています。

庄内 地区系 神楽



ごほうれいし
五方礼始

神楽を奉納するに当たり五方（東、南、中央、西、北）を清める舞です。陰陽五行説に従って東は木の神で青色、南は火の神で赤色、中央は土の神で黄色、西は金の神で白色、北は水の神で黒色であらわされています。日本の神話によれば、天地の創生と神々の生成を題材としたものです。



しばひき
柴曳

天の岩戸開きを祈って、天児屋根命・太玉命が八坂瓊の勾玉や八咫の鏡を真榊に掛け、岩戸の前に奉納するため、天香具山の真榊を根こそぎにするという神話を題材とした勇壮な舞です。



かごゆみ
鹿見弓

鹿見弓は、「武者」又は「天之鹿見弓」ともいいます。日本の神話による天の岩戸が開かれ、天照大神が連れ出されて再び世の中が明るくなったのを八百万の神々が鹿狩に使う天之鹿見弓と天羽羽矢を持ってお祝いに舞う神楽です。

● 庄内地域の神楽座 ●

阿蘇野神楽座
櫟木神楽座
大龍神楽座
小野屋神楽座
雲取神楽座

庄内原神楽座
竹の中神楽座
中臣神楽座
平石神楽座
庄内子供神楽座

みの草神楽座
瓜生田神楽座

おろちたいじ 大蛇退治

大蛇退治(八雲払)は、綱伐・蛇斬を変曲・変舞したものといわれています。物語は、高天原を追放された素戔鳴尊が、出雲の国簸の川の上流で八岐の大蛇を退治して、櫛稲田姫を助け八重雲を切り払い新居の宮居に八重垣を作るというものです。また、櫛稲田姫に付き添っている足摩乳(足名椎)・手摩乳(手名椎)は、足や手となって、という働きを意味し、櫛稲田姫の櫛は神秘力、すなわち魔除けの霊義、稲田姫は水田を生み出すの義といわれます。



くにつかさ 国司

日本の神話における出雲地方のために降臨神話を題材とした舞です。高皇産霊尊が経津主命と武甕槌命を遣わし、大国主命と国譲りについて談判をし、大国主命は御子事代主命と相談して国譲りを行う勇壮な舞です。(この場合、仲裁の使者として鳥船命又は、稲背脛命というチャリが登場して道化役を演じています)。

きけんじょう 貴見城

古事記・海神宮・日本書紀・海幸山幸を題材としたもので、瓊々杵尊の子に火闌降命(火酢芹尊)・彦火々出見命という兄弟神の物語です。二人はそれぞれが持っていた釣竿と弓矢を交換しました。弟神彦火々出見命が兄神火闌降命の釣竿で魚を釣っていたところ、釣鉤をとられてしまい別の釣鉤を作り兄神火闌降命に返したが、元の釣鉤を返すよう強要され弱っているとき、海神の助けで海神宮(貴見城)を訪れ釣鉤を探し出すという舞です。

● 挾間・湯布院地域の神楽座 ●

【挾間地域の神楽座】

上市神楽座
府内神楽保存会

【湯布院地域の神楽座】

並若神楽社
由布院神楽保存会
湯平谷川神楽

湯平子供神楽
ゆふいん子供神楽社

市指定重要文化財【無形文化財】平成 19 (2007) 年 6 月 29 日指定

「豊の国ゆふいん源流太鼓」は昭和54(1979)年に結成された和太鼓集団です。昔から地域に伝わっていた太鼓の調べを地域の人に知ってもらい伝えていき、地域を元気にしたいという想いで始めました。日本だけでなく、海外公演も実現しています。子どもたちに伝統文化を伝える活動を始め、子どもたちで結成する「ゆふいん源流少年隊」やその流れをくむ「三代目源流」は日本太鼓ジュニアコンクールにおいて、全国優勝するという快挙を成し遂げました。

海をこえて活やくする「豊の国ゆふいん源流太鼓」

結成当時、太鼓といえばお祭りや年に1~2度演奏される程度でした。一年間猛練習し「ゆふいん温泉まつり」で演奏を行ったことでメンバーは舞台上で演奏する喜びを知り、もっと和太鼓の魅力を伝えたいとさらに練習に打ち込みました。その結果、活動範囲は国を飛び越えて広がり、韓国で公演を行いました。この海外公演をきっかけに、現在まで60か国以上の地域で演奏やワークショップを実施し、国際交流を行っています。



由布市のいろいろなおまつり

どのおまつりに
行ったことが
あるかな？

由布市には、それぞれの地域ならではのまつりがたくさんあります。季節ごとに紹介します。

春

くろだけ ゆ ふ だけやまびら
黒岳・由布岳山開き(4月～5月)



あたたかくなってくると、由布市の山々はいっせいに芽ぶきの季節を迎えます。くじゅう連山の一つの黒岳では登山口のある男池を会場に、由布岳では、由布岳正面登山口を会場にして、登山者の安全を祈願する神事などがおこなわれます。

庄内地域



～黒岳の山開き～

湯布院地域



～由布岳の山開き～

おんせんまつ
ゆふいん温泉祭り(4月)

昭和25(1950)年に始まった温泉に感謝するお祭りです。毎年4月中旬におこなわれます。「献湯祭」という温泉のめぐみに感謝する儀式からはじまり、由布市親善大使任命式、伝統芸能の公演などの多彩な催しが行われています。

湯布院地域



ゆのひらおんせん
湯平温泉まつり(5月)

湯布院地域

ゆのひら おんせん めぐ かんしゃ まつ
湯平の温泉の恵みに感謝するお祭り
す。平成30(2018)年は139回目が
開催され伝統のあるお祭りです。幼稚園
の子どもたちによる稚児行列や参加者
が仮装をして石畳の坂道をかけあがる
「地獄の駕籠かきレース」など、この日
は湯平温泉の石畳が多くの人でとても
にぎわいます。



湯布院地域



ぶんか きろくえいがさい
ゆふいん文化・記録映画祭(6~7月)

へいせい ねん はじ えいがさい ゆふいんえいがさい
平成10(1998)年に始まった映画祭で、「湯布院映画祭」と
は別の文化、教育、科学、記録映画の映画祭です。映画と交流会を通
して、くらしをみつめてきました。この映画祭と縁の深かった記録
映像作家の松川八洲雄監督にちなんで松川賞も作られました。

おんがくさい
ゆふいん音楽祭(7月)

湯布院地域

ゆふいん かいさい
湯布院ラックホールで開催されてい
るクラシックの音楽祭です。昭和50
(1975)年の大分県中部地震が発生し
た年に由布院の元気を発信しようと
始まったイベントでしたが、平成21
(2009)年に終了しました。平成28
(2016)年4月に起きた熊本地震によ
り復活し、地元にも活気をもたらしています。



おのやじゅうしちやかんのんさい 小野屋十七夜観音祭(8月)

庄内地域

およそ 200年前、小野屋地区の伝治が淵とよばれる川の中に大きな亀が住んでいました。人々が、川を渡る際に亀の背中を石と間違えて、水に落ち、死んでしまうことがたびたびありました。この川で亡くなった人たちのたましいを弔うことから始まったお祭りです。



今では、多数の出店が並び、精霊流しや神楽、花火大会など、いろいろな催しが行われます。子どもたちも楽しみにしているお祭りです。

挾間地域

ゆふし なつまつ ゆふし はなびたいかい 由布市はさまこども夏祭り・由布市はさま花火大会(8月)

昼間は「由布市はさまこども夏祭り」が行われ、懐かしい遊びの体験コーナーや子どもひろばなどがあります。夕方からは盆踊り大会が行われ、その後は「由布市はさま花火大会」が行われます。大分川の河川じきが花火で明るく照らされます。この日は朝から夜まで挾間地域がにぎやかになる日です。

ゆふいんえいがさい 湯布院映画祭(8月)

湯布院地域

昭和51(1976)年に始まった、現存する中では日本最古の映画祭です。日本映画のファンと作り手が出会う場として、全員ボランティアで運営されています。前夜祭や映画監督・俳優による舞台挨拶、ゲストと参加者が話し合えるパーティーも行われます。

ゆのひらはぐま
湯平白熊まつり(9月)

湯布院地域

まいとしょうび かんけい がつ にち にち たにがわ
毎年曜日に関係なく、9月14日、15日に谷川
じんじゃ おこな れきし まつ こくほうじょう
神社で行われる歴史ある祭りで、五穀豊穰と
ちいき へいわ ねが むかし じもと あき たいさい
地域の平和を願う昔ながらの地元の秋の大祭
です。ゆうがた こ だいこ せんとう しろ け やり
夕方から子ども太鼓を先頭に、白い毛槍
かか はぐま おとしゅう ゆのひらおんせんいし
を掲げた白熊(=男衆)たちが湯平温泉石
だたみがい ね ある やましんじゃ くだ やましんじゃ
畳街を練り歩き、山神社へと下ります。山神社
こどもかくら
で子供神楽があります。



ゆ ふいんうしく ぜっきょうたいかい
由布院牛喰い絶叫大会(10月)

湯布院地域

しょうわ ねん はし だいしぜん かこ ひろ
昭和51(1976)年に始まったイベントで、大自然に囲まれた広い
ぼくそうち なか じもと ぶんご ぎゅう た あと
牧草地の中で、地元の「豊後ゆふいん牛」のバーベキューを食べた後、
さんかしゃ おも おも ぜっきょう こえ おお ないよう きそ
参加者が思い思いの絶叫をし、声の大きさや内容などを競います。
ないよう まいとしおお かんこうきゃく おとす こうれいぎょうじ
内容のユニークさから、毎年多くの観光客が訪れる恒例行事となっ
ています。



しょうないかぐらまつ しょうないちよう まつ
庄内神楽祭り・庄内町ふるさと祭り(11月)

庄内地域

まいとし がつ にち ぶんか ひ かくら さと ゆ ふ し しょうないちよう しょうないそうこう
毎年11月3日(文化の日)に、神楽の里由布市庄内町では庄内総合
うんどうこうえん しょうないかぐらまつ しょうないちよう まつ かいさい
運動公園にて庄内神楽祭り・庄内町ふるさと祭りが開催されます。

しょうないかぐらまつ しょうないかぐら けいしょう しょうないかぐらざ しょうないちいき
庄内神楽祭りは、庄内神楽を継承する庄内神楽座のほかに、庄内地域
ほいくえん こ ゆ ふ こうこう きょうどげいのうぶ おお かがら にな
の保育園の子どもたちや由布高校の郷土芸能部など多くの神楽の担
て いちどう かい しゅつえん ねんれいそう はばひろ しょうないかぐら
い手が一堂に会します。出演する年齢層も幅広く、庄内神楽のダイナ
ミックでリズムカルな舞を、朝から夕方まで一日中楽しむことができ
ます。同時開催の庄内町ふるさと祭りでは、農作物や特産品の販売、
どうじかいさい しょうないちよう まつ のうさくぶつ とくさんひん はんばい
40店以上の出店、子ども広場などがあり、多くの人でにぎわいます。
てんいじょう しゅってん こ ひろば おお ひと



はさま きちよくれまつ
はさま きちよくれ祭り(11月)

挾間地域

はさまちいき あき こうれい
挾間地域の秋の恒例イベント。「きちよ
くれ」とは、大分の方言で、「来て欲し
い」「来ておくれ」という意味です。挾間
はっしょう ち いみ はさま はいふ
が発祥の地とされる「やせうま」の配布
じもと と のうさんぶつ はんばい たしゅ
や地元で採れた農産物の販売、多種
たさい いんしょく なら かがら
多彩な飲食コーナーが並びます。神楽
たいこ
や太鼓、ダンスなどのステージや子
すもうたいかい おお もよお
も相撲大会など多くの催しでにぎわいます。



ならねっ子まつり(11月)

挟間地域

挟間地域の出身で、全国に児童文学
 (童謡・童話)の種をまいた「児童文化の
 父」後藤榎根を記念したお祭りです。榎
 根が夢見た「児童文化の花」を咲かせる
 ため、会場では榎根作品の読み聞かせや
 子どもコーラス、押し花や昔の遊び体験
 コーナーなど、たくさんの催しが行わ
 れます。大人も子どももみんなで楽しめるお祭りです。



冬



塚原甘酒まつり(12月)

湯布院地域

毎年12月11日に開催される霧島神社
 (男能濃松神社)のお祭りです。その年に
 来たお米で甘酒をつくり、神様におそなえし
 て、豊作と平和であることを感謝し、お祈り
 をします。お祭りの準備は、甘酒づくりのた
 めの蔵(小屋)を建てることから始まります。



蔵にはしめ縄を張り、甘酒づくりには、決められた人しか入れない、
 など様々な決まりごとがある伝統のあるお祭りです。



だいじょうごんじんじゃはる たいさい
大將軍神社春の大祭(1月)

だいじょうごんじんじゃ むかし ぎゅうば かみさま しんこう まいとし しんれき
大將軍神社は昔から牛馬の神様として信仰されています。毎年、新曆
がつ にち かかん おこな まつ のうこう
1月13日からの3日間に行われるこの祭りは、農耕にかかせなかった
ぎゅうば あんぜん けんこう いの まつ げんざい むびょうそくさい ねが ひとびと
牛馬の安全や健康を祈るお祭りであり、現在は無病息災を願う人々が
まい おとす しょにち ちょうない ちくさんのうか わぎゅう いっしょ さんばい
参りに訪れます。初日には町内の畜産農家が和牛と一緒に参拝し、
けいだい うえき かなもの あめ ろてん で にぎ
境内には植木、金物、飴など露店が出て賑わいます。



由布市の料理（郷土料理）

(1) 主食として食べられるもの

だんご汁

由布市だけでなく県内各地で日ごろから食べられていた「だんご汁」。作り方は、いりこを入れふっとうさせたお汁に、季節の野菜を入れます。そこに、小麦粉と塩と水で練って作った“だんご”を伸ばして入れます。最後に、お味噌で味付けをします。



昔は違った“だんご汁”？

昔は、「だんご汁」と言えば、米粉で作っただんごを手でにぎって入れたものでした。そして、今のように、小麦粉で作っただんごを手で伸ばしながら入れたものは「ほうちょう汁」といって、区別されていました。そのうち「だんご汁」は、大事な米粉の代わりに小麦粉を使うようになり、いつの間にか、昔の「ほうちょう汁」と「だんご汁」が一緒になって、今では「だんご汁」が郷土料理として知られています。

かしわ汁

農家では、多くの家でにわとりが飼われていました。祝い事など人が集まる特別なときに、家のにわとりをつぶして振る舞われていたのが、「かしわ汁」です。具はとり肉とごぼう、お汁は、醤油と酒で味付けします。山に囲まれた湯布院町では、とりを使ったお吸い物が好まれ、昔はごちそうだったそうです。



かしわめし(とりめし)

かしわめしは、とり肉を使った炊き込みご飯です。大分県内全域で親しまれていますが、作り方や入れる具は地域によって違います。昔、庄内地域では、来客や行事の時に、「塩け飯」の中に鶏肉(かしわ)と野菜を混ぜたものが作られていました。湯布院地域では、ごぼうと人参をそいで、鶏肉と一緒に炊いたかしわめしが親しまれてきました。



●作ってみよう！～かしわめしの作り方～●

材料		*作り方*
米	3合	①米を洗い、通常の水の量で炊く。
鶏肉	200g	②鶏肉、人参はこま切り、ごぼうは小さめにそぎ切りにする。
ごぼう	100g	③②を油で炒め、20分ほどにする。
人参	70g	④材料が柔らかくなったら、砂糖醤油で味を整え、炊き上がったごはんの上に平に乗せ、煮汁を少々かけたら、もう一度炊飯器のスイッチをいれ、追い炊きする。
しょうゆ	70cc	⑤スイッチが切れたらよくかきまぜる。
砂糖	少々	
サラダオイル	少々	

『100歳イリエおばあちゃんの知恵袋』63ページより

けんちゃん(けんちん)

大分県内でも「けんちん(けんちゃん)、けんちん汁(けんちゃん汁)」とって、各地で作られる郷土料理ですが、地域によってよび方や作り方が異なります。由布市で作られる「けんちゃん」は、お汁がない、具を中心とした料理です。お豆腐と根菜類を大きく切って、炊いたものです。



(2) 由布市のおやつ

やせうま

「やせうま」は由布市挾間町で生まれたとされています。もとは仏教の儀式や行事のときの食べ物ですが、昭和30(1955)年頃から家庭のおやつとして親しまれてきました。小麦粉でつくった団子を細長く引き伸ばし、ふっとうしたお湯でゆでます。塩と砂糖で味つけしたきなこをまぶして出来上がり。



「やせうま」のなまえの由来

その昔、平安時代にみやこからこの挾間の片田舎におちのびてきた貴族の子どもがいました。名前は藤原鶴清磨といいました。鶴清磨は、おなかがすくと、乳母の「八瀬(やせ)」におやつをせがみます。そうして八瀬が作ってあげたのがこの「やせうま」です。それから鶴清磨は、おなかがすくと「やせ、うまがほしい」「やせ、うま、うま」と言っておやつをせがんだそうです。それが「やせうま」というおやつになったということです。

じりやき(ひやき)

子どものおやつや雨の日の「こびる(こびり)」としてよく作られていたのが、「じりやき(ひやき)」です。

じりやきは、小麦粉を水でゆるく溶いたものを薄くのばして焼きます。できた生地に黒砂糖やかぼちゃの“あん”を巻いて食べます。現代では卵を入れて、ふわっとおいしく作ります。「じりやき」と言われるようになったいわれは、“じりじり焼く”からとも、生地が“じりい(「ゆるい」の大分弁)”からとも言われています。県内各地で食べられています。



かぼちゃもち

地元でとれた小麦粉と、かぼちゃで作るおもちです。ベーキングパウダーを入れないため、ずっしりと重くなります。作り方は、小さく切ったかぼちゃに砂糖をまぶして一晩ねかせます。かぼちゃから水分が出てくるので、その水分で地粉をこね、かぼちゃと混ぜて蒸したらできあがり。



農家のおやつ～こびる・こびりの習慣

田植えや稲刈りなどで特に農作業の忙しい時期には、10時頃と15時頃に「こびる(こびり)」をとる習慣がありました。「こびる(こびり)」とは、「軽い食事」や「おやつ」のことです。「こびる(こびり)」で食べられていたものは、おにぎり、じり焼き(ひやき)、さつまいも、炭酸まんじゅう、ゆでもち、石垣もち・飯餅・あられなどがありました。

(3) 特別なときの料理

とき お斎

法事の最後に振る舞われるお料理を「お斎」と呼びます。昔は、お葬式や法事を家で行っていたので、近所の農家の方から野菜やお米をいただくなどしてお斎を作っていました。お斎というのは、もともと、お坊さんがお寺で食べる料理のことでした。そのため、肉や魚の使われない精進料理で、「殺生」を連想させるメニューはありませんでした。作り方や盛り付け方も決められていて、作るのが大変だったそうです。



今では、ホテルや料亭などで法事を行うことが一般的になりました。そのため、料理の内容も比較的的自由になっています。

由布市の文化財

「文化財」とは、由布市の歴史を知るための大切に守っていかねばならないもののことを言います。現在、由布市には国指定文化財が4件、県指定文化財が20件、市指定文化財が57件と全部で81件の文化財があります。ここでは、ぜひ、みなさんに知ってもらいたい文化財を紹介します。



文化財っていうのは、由布市のたからものことなんだって。

古いものばかりだと思ってたよ



古いけど、残っていることで昔の由布市がどんな地域だったのか、知ることができるよ。

しょくぶつや生きものは？



とくていの場所でしかみられないしょくぶつや生き物も記念物といった名前で登録されるよ。そうすることで、守っていくことができるんだ。

国指定重要文化財

けんぼんちやくしよくほうぎゅうこうりんぞう びじゅつひん こうげいひん 絹本著色放牛光林像(美術品・工芸品)

国指定重要文化財【絵画】平成2(1990)年6月29日指定

けんぼんちやくしよくほうぎゅうこうりんぞう はさま りゅうしょうじ てら ほう
絹本著色放牛光林像とは、挾間の龍祥寺というお寺をひらいた「放
ぎゅうこうりん ぼう え おお たて よこ
牛光林」というお坊さんの絵です。大きさは縦100.2cm、横50.4cm
で、せ まる うわめ つか するど め こうりん とくちょう ひょうげん
背を丸めて上目遣いの鋭い目に、光林の特徴が表現されていま
す。けんぼんちやくしよく きぬ のの いろ ぬ ほうほう おくふか ひょうげん あじ
絹本著色とは絹の布に色を塗る方法で、奥深い表現ができ、味わ
いのある仕上がりとなるのが特徴です。ほうぎゅうこうりん さい
放牛光林は、「10歳にしてす
でにほけきょう けこんきょう にきょう あんしょう とな つた
法華経と華嚴経の二経を暗唱して唱えた。」と伝えられています。
さいぜんご ちゅうごく わた まな りゅうしょうじ かいざん けんとくがん
30歳前後で、中国に渡り学びました。龍祥寺の開山が建徳元(1370)
ねん こうりん さい ねんご さい な
年、光林が81歳のときでした。そして3年後、84歳で亡くなってい
ます。



おおごしゃ おお てんねんきねんぶつ
大杵社の大スギ (天然記念物)

国指定重要文化財【天然記念物】昭和9(1934)年8月9日指定

ゆふいん おおごしゃ けいだい おお おお ね
湯布院の大杵社の境内にひときわ大きい大スギがあります。根っこの
まわ やく むね たか みき ふと やく き たか やく
回りは約15m、胸の高さでの幹の太さは約10m、木の高さは約37m
にもなります。じゅれい せんねんいじょう ねんげつ かせ
樹齢は千年以上ともいわれています。年月を重ねるご
とに、えだ お ともろくなっていますが、いま あおあおとしたは
をしげらせています。



イヌワシ

国指定文化財【天然記念物】昭和40(1965)年5月12日指定

イヌワシはタカの一^{いっしゆ}種で、するどいくちばしとツメをもち、ほかの動物^{どうぶつ}を食べる猛禽^{もうきんるい}類です。体長は75~95 cm、左右のつばさを広げると1m70 cm~2m20 cmにもなります。崖^{がけ}などに生える高い木に巣^すをつくり、主^{おも}にノウサギやヤマドリ、ヘビ^{へび}等をえさとします。えさをとる場所は低い木がしげっている場所^{ばしよ}や草原^{そうげん}のような開けた場所^{ひら}ですが、そのような場所^{ばしよ}が日本^{にほん}では少^{すく}なくなっているため、イヌワシが暮らすことができる場所^{ばしよ}も減^へっています。環境省^{かんきようしょう}が出した「絶滅^{ぜつめつ}のおそれのある野生生物^{やせいせいぶつ}の種^{しゆ}のリスト(レッドリスト)」では「絶滅^{ぜつめつ}の危険^{きけん}が増大^{ぞうだい}している種^{しゆ}」に指定^{してい}されており、とても貴重^{きちよう}な鳥^{とり}です。大分県^{おおいだけん}では、昭和61~63年度^{しょうわ}に調査^{ねん}がおこなわれ、オス^{おとこ}とメス^{メス}のつがい^{ちゆうさ}が確認^{かくにん}されました。イヌワシが生活^{せいかつ}する範囲^{はんい}は広く、由布市庄内^{ゆふし}・湯布院^{ししやうない}地域^{ちゆうい}、竹田市直入^{たけたし}・久住^{くじゆう}地域^{ちゆうい}、九重^{ここのえまち}町にまたがるくじゅう^{くじゅう}の山々^{やま}です。また黒岳^{くろだけ}周辺^{しゆうへん}に巣^すがつくられていることも九州^{きゆうしゆう}で唯一^{ゆい}確認^{かくにん}されました。



△飛翔するイヌワシ（日本野鳥の会 大分県支部提供）

きゅうひ の いいん けんぞうぶつ
旧日野医院(建造物)

国指定重要文化財【建造物】平成 11(1999)年 12月指定

湯布院にある日野病院は、江戸時代から始まった医者の家系によって
つくられた歴史のある病院です。川西地区にある旧日野医院の建物は、
明治27(1897)年に日野家の3代目の日野要さんによって建設され
ました。日本の職人が洋式建築をモデルとして作ったもので、大分
県内では最も古いものとされています。日本でも珍しい建物で、平成
11(1999)年に日本の重要文化財に指定されました。



●行ってみよう! ●

大工さんが作った洋風の木造建築です。玄関上のベランダやらせん階段などちいさなところまで、作っているよ。こて絵もあるよ。

大分県でも当時はめずらしい女性のお医者さん、日野俊子先生もここで活やくしたよ。



県指定文化財

はさまなおしげし ぼ ひ せきぞうごりんとう さんき 狭間直重氏の墓碑(石造五輪塔(三基))

県指定重要文化財【建造物】昭和 47(1972)年 3月 21日指定

はさままち りゆうしょうじ てら にしがわ かまくらじだい せんごくじだい はさ
狭間町の龍祥寺というお寺の西側には、鎌倉時代から戦国時代まで狭
ままちいったい しはい はさまし ぼち
間町一帯を支配していた狭間氏の墓地があります。その真ん中に、
いちばんおお ぼせき
一番大きくどっしりとした墓石があります。それがはさまししよだい はさま
なおしげ はか なおしげ おおともけ しよだいおおともよしなお まご かまくらじだい
直重のお墓です。直重は大友家の初代大友能直の孫で、鎌倉時代や
むろまちじだい こんらん じだい ちゅうごく げん くに き とき
室町時代の混乱していた時代に中国の元の国がせめよせて来た時、
おおともけ いちぞく はんえい ささ
大友家の一族としてその繁栄を支えました。



直重はどの家来よりも力もちで、どんな大男でも持ち上げることのできなかつた大きな石をかんたんに持ち上げて歩いてみせるほど、怪力の持ち主だったんだって。



オダニのくるま橋

県指定重要文化財【建造物】昭和 52(1977)年 3月 31日指定

「オダニのくるま橋」は庄内町櫟木の間田川にかかる石橋です。橋の長さは約12m、アーチ部分は幅約6m、高さは約4m。川幅に比べて大きくどっしりとした橋です。ばらばらな大きさの石を積み上げる「切り込みハギ」と呼ばれる技術が使われていますが、壁の部分は隙間がなく、きれいにつみ上げられています。由布市にある石橋の中でも一番古く、美しい橋です。たくさんの工夫によって支えられているこの橋は、「未来永劫流されない強い橋をかけるのだ」という当時の人々の思いが伝わってきます。



半円状にくり抜いたように見えるつくりの橋を「アーチ橋」といいます。大分県では「くるま橋」と呼ばれていました。世界各地でみることのできる、橋のつくりかたです。



ゆふいん ぼぐん 由布院キリシタン墓群

県指定史跡【史跡】昭和 35 (1960) 年 3 月 22 日指定

由布院盆地内にはキリシタンの墓、もしくは隠れキリシタンの墓と伝えられるものがたくさん残っています。その数は、500基以上とも言われています。このうち特に多くの墓が集まっているのが「並柳墓地」です。並柳墓地は現在も共同の墓地として使用されていますが、キリシタンのお墓は日本でよくみられる仏教式のものと



違い、直方体の平らな石を地面に置いただけのお墓です。ほとんどのキリシタンの墓では薄型に十字が彫られており、その交差の仕方にも様々な種類があります。

キリシタンの多い村だった由布院

戦国時代の大名、大友宗麟はキリスト教の宣教師の布教活動を守り、大友宗麟もキリスト教の洗礼を受けたためキリシタン大名と呼ばれました。

天正 6 (1578) 年、由布院地域の有力者だった奴留湯(ぬるゆ)氏一族が洗礼を受けたことや、大友宗麟の保護によりキリスト教は由布院にひろまり、宣教師とキリシタン達の手によって、由布岳の山頂に十字架が建てられたそうです。当時、由布院には 1500~2000 人のキリシタンがいたと言われています。天正 14 (1586) 年には今の興禅院の場所に「聖ミゲル教会」が建てられました。しかし、その年の 12 月、鹿児島島の島津軍が由布院に乱入し、教会も破壊しました。さらに翌年 6 月、豊臣秀吉が宣教師に国外に出ていくよう命じ、何度も出された禁教令により、キリシタンは少なくなってしまいました。



市指定文化財

あなんばし 阿南橋

庄内地域

市指定重要文化財【建造物】平成 19(2007)年 6月 29日指定

大分県では初となる洋式のアーチ型の石橋で、由布市の指定文化財に認定されています。直方体に加工した石を積むように並べる「布積み」と呼ばれる技法を使っています。実用的な橋としての機能だけでなく、石造美術としての「見せる」工夫も備えた美しい橋です。

えいけいじ ちゃがま 永慶寺の茶釜

庄内地域

市指定重要文化財【工芸品】平成 19(2007)年 6月 29日指定

庄内町五ヶ瀬の丘の上に、永慶寺というお寺があります。ここに大切にされている茶釜があり、羽を含む直径は 40cm ほどあります。湯が沸き立つ時に透かして見ると、金色に輝いて見えると言われています。永慶寺は建長 2(1250)年からあるお寺で、39代にわたり絶えることなく教えを守り保ち続けています。



永慶寺の茶釜の不思議～夜な夜な泣く金の茶釜

むかし、永慶寺には大きくて立派な金の茶釜があり、寺の宝物として大切にされていました。ところが戦国時代のある日、薩摩の島津勢が豊後に攻め込んできました。永慶寺のあたりでも戦いがおこり、寺もついに焼かれてしまいました。戦いが終わって、和尚さんが戻ってみると、大切な茶釜がなくなっています。和尚さんはとても心配して一生懸命探してみましたが、見つけることができませんでした。それから何十年もたったある時、妙な噂が広まりました。「大分にものをいう茶釜があるそう。永慶寺へ帰りたい、永慶寺へ帰りたいと、夜なくそう。不思議な茶釜じゃあ。」その茶釜の持ち主は、古道具屋でいい茶釜を見つけたので買って帰りましたが、このような奇妙な事がおこるので気持ち悪くなり、永慶寺に返すことにしました。永慶寺に帰った茶釜は、湯を沸かすとそれはそれは、何とも言えない、いい音がしました。その音は、静かにお経を唱えるようで、村人はその音を聞くと心が落ち着き、優しい気持ちになったということです。(出展:永慶寺史料)